

## 【走者に関する規則】

### 1. 二走者が同一塁上にいる場合 (5.06 (a)(2)、5.06 (b)(2))

- (1) ボールインプレイの状態、二人の走者が同一の塁に触れているとき、その塁を占有する権利は、前位の走者にある。したがって、後位の走者は触球されればアウトとなる。(5.06 (b)(2)項適用の場合は除く)
- (2) 打者が走者となったために進塁の義務が生じ、二人の走者が後位の走者が進むべき塁に触れている場合には、その塁を占有する権利は後位の走者に与えられているので、前位の走者は触球されるか、野手がボールを保持してその走者の進むべき塁に触れればアウトになる。  
[ジェスチャーの統一14]

### 2. 捕球後ボールデッドの個所に入った場合の進塁

(5.06 (b)(3)(C)、5.09 (a)(1) 【原注1】、5.12 (b)(6))

野手が飛球を捕らえた後、ボールデッドの個所に踏み込んだり、倒れ込んだ場合、ボールデッドとなり、各走者は野手がボールデッドの個所に入ったときの占有塁から1個の進塁が許される。

[ジェスチャーの統一18]

### 3. 打撃妨害発生時の盗塁 (5.06 (b)(3)(D) 【注】)

打者が捕手またはその他の野手に打撃妨害されたときは、塁上の各走者を元の占有塁に戻すのが原則であるが、盗塁行為のあった走

者だけは次塁への進塁を認める。

ただし、後位の走者に盗塁行為があっても、前位の走者に盗塁行為がなければ進塁は認めない。

#### 4. 走者の安全進塁の基準 (5.06 (b)(4)(G)(H))

悪送球により安全進塁を認める場合は、次の点に注意しなければならない。

- (1) 打球を処理した直後の内野手の最初のプレイに基づく悪送球の場合は、投手の投球当時の各走者の位置を基準として2個の塁を与える。
- (2) (1)の場合であっても、打者を含む各走者が少なくとも1個の塁を進んでいた場合には、その悪送球が内野手の手を離れたときの各走者の位置を基準として2個の塁を与える。
- (3) その他の送球の場合（外野手からの送球も含む）は、悪送球が野手の手を離れた時の各走者の位置を基準として2個の塁を与える。
- (4) 投手の投球または投手板からの送球が、スタンドやベンチに入ったり、バックネットを抜けた場合は1個の塁を与える。ただし、捕手や野手を通過した後、さらに捕手または野手に触れてボールデッドとなる場所へ入った場合は、投手の投球または送球当時の各走者の位置を基準として2個の塁を与える。

#### 5. 走者が打球に触れた場合 (5.06 (c)(6)、5.09 (b)(7)、6.01 (a)(11))

- (1) 内野手（投手を含む）に触れていないフェアボールが、フェア地域で走者に触れた場合は、守備妨害でアウトになる。この際は、ボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁へ進塁を許された走者以外は、得点することも進塁することもできない。
- (2) 走者がフェアボールに触れてもアウトにならない場合がある。
  - ① いったん内野手（投手を含む）に触れたフェアボールに触れた場合。
  - ② 1人の内野手（投手を除く）に触れないで、その股間または側方を通過した打球にすぐその後方で触れても、この打球に対して他のいずれの内野手も守備する機会がないと審判員が判断した場合。  
いずれの場合もボールインプレイである。
- (3) インフィールドフライと宣告された打球に触れた場合。
  - ① 走者が塁を離れている場合、打者・走者ともアウトになる。
  - ② 走者が塁についている場合、打者だけがアウトになる。  
いずれの場合もボールデッドである。

## 6. ラインアウト (5.09 (b)(1))

- (1) 野手が触球しようとしたときに、走者がこれを避けようと、走者のベースパス（走路）から3フィート以上離れて走った場合は、その走者に「アウト」を宣告する。
- (2) 触球を避けようとしたときは、その走者の位置と、その走者が向かっている塁とを結ぶ直線の内外3フィートまでを走路として

認める。

- (3) この規則を適用するには、野手の触球行為が必要である。

ただし、走者が打球を処理しようとする野手を避けるために前記のベースパスを離れても、この規則は適用しない。

※ 「触球行為」とは、①単に野手がボールを保持した状態での保持されたボールが取まったグラブ或いはボールを掴んでいる手で走者にタッグしに行くことに限らず、②打球（送球）を処理して、ボールを保持した状態の野手がステップしただけで走者の方向を向いた場合でも、たとえば手を差し出す行為がなくても、アウトにしようとする行為だと審判員が判断できれば「触球行為」とみなす。

例えば、野手が走者にタッグしようとしたとき、その走者がタッグされまいとしてすでに大きく走路から外れていた場合、②の解釈によりアウトが宣告できるということである。

[ジェスチャーの統一15]

## 7. 走者の進塁権放棄によるアウトの適用

### (5.09 (b)(2) 【原注】 【注】)

一塁に触れてすでに走者となったプレイヤーが、ベースパスを離れたため走塁する意思を放棄したとみなした場合は、その走者に対して「アウト」を宣告する。なお、アウトを宣告した場合でも、他の走者はボールインプレイである。

ただし、例えば、満塁で決勝安打が出たような場面で、一塁また

は二塁の走者が次塁への進塁を果たそうとしないようなとき、すなわちフォースの状態にある走者に対しては、本規則を適用しない。

したがって、進塁を果たさなかった塁か、その走者に触球しなければアウトの宣告はできない。

## 8. 打球を処理する野手に対する守備妨害

(5.09 (b)(3) 【注1】、6.01 (a)(1) 【原注1】)

フェアボールとファウルボールの区別なく、走者が打球を処理しようとしている野手の妨げになったと審判員が判断した場合、それが故意であったか、なかったかの区別なくその走者をアウトとする。

守備妨害の対象となる“打球の処理”とは、野手が、打球に対して守備しはじめてから打球をつかんで送球し終わるまでの行為をいう。

## 9. スクイズプレイ等でボールを持たない捕手が本塁上に出た場合

(5.09 (b)(8)、6.01 (g))

### (1) 投手が投球した場合

- ① 三塁走者がスクイズプレイまたはホームスチールで得点しようとしたときに、捕手がボールを持たないで本塁の上、またはその前方に出た場合は、打者が打とうとしたか否か、打者席内にいたか否かに関係なく、捕手の打撃妨害とボークを同時に適用する。

この場合、すべての走者はボークによって盗塁行為の有無に関係なく1個の塁を進める。

② 規則6.01(g)は、投手の投球が正規、不正規にかかわらず適用される。

(2) 投手が投手板を正規にはずして本塁へ送球した場合

投手の送球は正規のものであり、捕手がこの送球をホームベースの前方に出て捕らえても何らペナルティはない。

したがって、打者がこの送球を打てば守備妨害となり、その守備の対象となる三塁走者はアウトとなる。この場合、打者のボール、ストライクをカウントしない。

#### 10. 追い越し (5.09 (b)(9))

後位の走者が、前位の走者を追い越した場合は、後位の走者をアウトとする。

また、逆走の際に走者の位置が入れ替わった場合も、つねに後位の走者がアウトとなる。

なお、この規則は、安全進塁を認められた走者がボールデッド中に前位の走者を追い越した場合にも適用する。(例・本塁打のとき等) 〔ジェスチャーの統一19〕

#### 11. 塁を空過した走者の触れ直し (5.09 (c)(2) [規則説明])

(1) 塁を空過した走者は、ボールインプレイ、ボールデッドを問わず、後位の走者が本塁に到達すれば、空過した塁への触れ直しはできない。

(2) ボールデッドのときは、空過した塁の次の塁に達すれば、空過

した塁に触れ直すことはできない。

- (3) 本塁を空過した走者は、ボールデッドのとき、投手がボールを持ち正規に投手板につけば、それ以後本塁に触れ直すことはできない。
- (4) 飛球が捕らえられたために、元にいた塁に帰らなければならなくなった走者は、その後のプレイ（悪送球など）で安全進塁権を与えられた時でもリタッチを果たさなければならない。この際、ボールデッド中にリタッチを果たすことはできるが、次塁に達したら元の塁の踏み直しはできない。

## 12. 走塁妨害 (6.01 (h)(1)(2)、定義51)

走塁妨害とは、野手がボールを持たないときか、あるいはボールを処理する行為をしていないときに、走者および打者走者の走塁（帰塁の場合も含む）を妨げる行為である。

- (1) h(1)項は、走塁を妨げられた走者に対してプレイが行われていた場合、または打者走者が一塁に触れる前にその走塁を妨げられた場合に適用する。
  - ① 「タイム」を宣告し、ボールデッドとする。妨害した野手を指差し「オブストラクション」をコールする。
  - ② 妨害された走者には、最低1個の進塁を認める。
  - ③ 妨害された走者に進塁を認めたために、押し出される前位の走者にも、安全進塁権を与える。
  - ④ 妨害発生以前に行われていたプレイ（例えば、ボールデッド

となる個所へ入った悪送球など)は、審判員が各走者の進塁を  
決めるときの判断に加味しなければならない。

〔ジェスチャーの統一9〕

(2) h(2)項は、走者に直接プレイが行われていないときに走塁を妨害された場合に適用する。

- ① 審判員が「オブストラクション」を宣告(シグナル)しても、プレイは停止するまで続けられる。
- ② 審判員は、一連のプレイが停止した後、「タイム」を宣告し、妨害がなければその走者がどこの塁まで達し得たかを協議して決める(後位の走者も含む)。この場合、必ずしも1個の進塁を許すとは限らない。
- ③ 走塁を妨げられた走者が、審判員の判断によって与えられる塁よりも余分に進んだ場合は、安全進塁権はなくなり、触球されればアウトとなる。

〔ジェスチャーの統一9〕

### 13. 捕手の走塁妨害 (6.01 (h)(1) 【付記】、〔高校野球特別規則16〕)

(1) 捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線は走者の走路である。

(2) 規則書では、捕手が塁線上に位置することができる場合について具体的に記されているが、高校野球では、アンフェアで危険なプレイを防止するために、「捕手はボールを保持している(まさに走者に触球しようとしている)ときしか塁線上に位置することはできない」と高校野球特別規則で定めている。